徳島大学総合科学　人間科学研究
第2巻（1994）45－65

ダンス指導の現状と問題点
－四国地区中学校教員を対象として－

中村　久子[1)]，安藤　幸[2)]

The Present State and the Points at Issue Concerning Dance Lessons of Junior High School Teachers in the Shikoku Area

Hisako NAKAMURA and Miyuki ANDO

Abstract

The elective subjects system was introduced in the new course of study for physical education in Japan. In junior and senior high school, dance was changed to an elective subject from a required subject and, at the same time, the classes of mixed gender were introduced. This kind of renovation of the course of study brought forward new problems such as optionality and mixed learning in the field of dance education. Under this kind of situation, there is an urgent need to grasp the present state and the points at issue concerning dance lessons and to make some pertinent suggestions or proposals to improve dance education. The purpose of this study, therefore, is: 1) to investigate what kind of ideas the junior high school teachers in the Shikoku area have about teaching dance lessons including optionality and mixed-learning, 2) to clarify issues related to teaching those lessons, 3) to compare the results with the results of nationwide survey and 4) to propose some suggestions to improve dance education in the area.

Method:

1) Subjects; 336 junior high school teachers situated in 4 prefectures in the Shikoku area.

2) Response rate; 47.2%.

3) Time period; from October 15 to November 11, 1991.

4) Procedure; mail questionnaire consisting of 68 items concerning gender, age, years of dance experience, major in university, ideas for dance, problems in teaching dance, specific points in teaching dance, elective subjects system, mixed learning, and so on.

1）徳島大学総合科学部　舞踊学研究室
2）鳴門教育大学学校教育学部　生活・健康系（保健体育）教育講座

The results are as follows:

1) Experience of learning dance in university greatly influences one's view of dance, view of teaching dance lessons, and teaching ability and turns out to be a motivating force toward the practice of teaching dance lessons. This result obtained in the Shikoku area is similar to the tendency observed in the results of the nation-wide survey.

2) Experience of teaching dance lessons is considered to forster one's view of teaching dance lessons and, at the same time, to become one's motivating force to the practice of teaching dance lessons. But in the Shikoku area, fewer opportunities are given to female teachers than the average of the whole nation. The problem here is how to secure opportunities for female teachers so that they can practice teaching dance lessons.

3) According to the nation-wide survey, the emphasis is placed upon improving one's practical skills in the content of university dance education and it is pointed out that not only practical dancing skills, but also practical ability in creating dance should be improved. This is also applicable to the Shikoku area. University curriculum and the content of short-term courses for in-service teachers should be renovated to put emphasis on teaching method, and the renovation is especially required in the Shikoku area.

4) Difference between male and female teachers concerning the experience of learning dance and the practice of teaching dance lessons is quite obvious on a nation-wide scale. As one of the ways to extend and enrich the practice of teaching dance lessons, more opportunities of learning dance should definitely be given to the male teachers.

キーワード：ダンス，選択性，男女共修，現職教員研修

はじめに

中学校の体育科では新学習指導要領に基づいて，男女共修，選択性の導入等今までにない新しい試みが導入されることになった。特に選択性の導入には，多様化する運動へのニーズに対応する意義と将来にむけての生涯スポーツに繋がる意義が考えられている。種目の選択性の導入には教員数や施設等の問題もあり，どのように取り入れていくかについて教育現場で検討を重ねているところである。中学校の保健体育科では，今まで男女別のクラス形態をとっていたが，男女混合クラスが導入されることにより，男女が一緒に学習することになった。

このような学習指導要領の改訂は，ダンス教育にも男女共修，選択制等，新たな問題を提起した。ダンス学習が生涯教育とどう関わっていくのか。そのために，教員養成の立場から，指導者の資質として何を準備すべきなのか，生徒にはダンスの何を，どのように体験させるのかを改めて考える時期にきている。

そこで，本研究では四国地区の中学校におけるダンス指導の現状を把握し，現職教員が指導実践に関わる事柄についてどのように考えて指導を実践しているのか，男女共修や選択制についてどのように考えているのかを探り，全国調査との比較・検討を行い，今後の大学でのダンス教育におけるカリキュラムの検討，現職教員への研修，研究などへの提言に向けての資料を得ようとするものである。

1．研究目的

四国地区の四県（徳島県，香川県，愛媛県，高知県）に勤務する中学校教員（男性，女性）を対象に，現職教員のダンスに対する指導の実態と意識を調査し現状を把握する。その調査結果を既に発表されている全国調査結果と比較し，四国地区におけるダンス指導上の問題点をとらえ，ダンスに対する大学での教育および現職教員への研修に関わる資料を得ることを目的とする。

本研究は，日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門・全国舞踊研究会が，1991年度研究プロジェクトとして実施した「ダンス指導実践にかかわる現職教員の意識」に関する全国調査の一部であり，四国地区を重点的に調査，分析したものである。つまり，全国調査と連動した調査であり，全国調査の一翼を担うものである。

2．研究方法

1）調査対象者

四国地区公立中学校の各体育主任宛にアンケート調査用紙と回答用紙二組を郵送し，「年齢に関係なく男女各一名の回答」を依頼した。

郵送数	徳島県公立中学校	66校	（132名）	
	香川県公立中学校	68校	（136名）	
	愛媛県公立中学校	156校	（312名）	
	高知県公立中学校	66校	（132名）	
	合計	356校	（712名）	
回収数	徳島県公立中学校	51名	（回収率	38.6%）
	香川県公立中学校	98名	（回収率	72.1%）
	愛媛県公立中学校	147名	（回収率	47.1%）
	高知県公立中学校	40名	（回収率	30.3%）

2）調査期日　1991年10月15日～11月20日

3）調査方法

郵送によるアンケート調査

4）調査項目

調査内容は，68項目から成り，大別すると次の七つに分類される。

① 対象者の属性
　性別，年齢，教職経験年数，専攻・専修教科，体育専攻・専修教員の専門実技種目

② ダンス（表現運動）全般に対する考え方
　ダンスの経験，ダンス観，ダンスとの関わり

③ 大学時代のダンス履修の実状
　授業内容，実技内容，授業の印象，授業の成果

④ 授業（ダンス）指導，自己研修，校内・校外研究会の現状
　研修の参加，研究会実施の状況，授業実践・指導に対する考え方と対応の在り方，指

導上の問題点

⑤　効果的指導に対する考え方

「導入・展開・まとめ」の各段階と全般的指導のポイントと問題点

⑥　体育における種目選択制・男女共修

選択制・男女共修の実施についての考え方と実施の時期について

⑦　武道・ダンスの選択制

武道・ダンスの選択制についての実施と男女混合クラスでのダンスの授業についての考え方。

5）集計と分析

NEC PC 9801 FX によりアンケート調査集計シリーズ「秀吉」k. k. 社会情報サービスを利用して行った。

3．調査結果

1）対象者の属性

男女比については，調査依頼の段階でアンケート用紙二部を用意して「調査対象校に男女各一名」の回答を依頼した関係上，ほぼ半数の割合の回答率（男：51.8%，女：48.2%）になった。昨年度にまとめた「表現運動指導の現状と問題点－四国地区小学校教員を対象として－」では，小学校における女性教員の絶対数が多いことを反映して男女比は男：48%，女：52%で，僅少ではあるが女性教員の回答率が高かった。中学校においては，保健体育科教員の配置が一，二名の場合には男性教員のみで女性教員が配置されていないという現状を反映して，僅少ではあるが男性教員の回答率が高くなった。

年齢については図1に示すとおりである。四国地区四県においてバラつきはみられるが，四国地区全体としては20歳代が32.4%，30歳代が40.8%，40歳代が20.2%，50歳代が6.5%であ った。

教職経験年数は調査対象者の年齢と対応し，0～4年間は23.8%，5～9年間は26.5%，10～14年間は21.1%，15～19年間は11.6%，20～24年間は9.5%，25～29年間は3.6%，30年以上は3.9%であった。

調査対象者の専攻については，徳島県の94.1%，香川県の99.0%，愛媛県の83.6%，高知県の89.7%が保健体育専攻であった。四国地区全体の回答者のうち9.6%が保健体育以外を専攻した教員が保健体育科を指導しているという実態である。

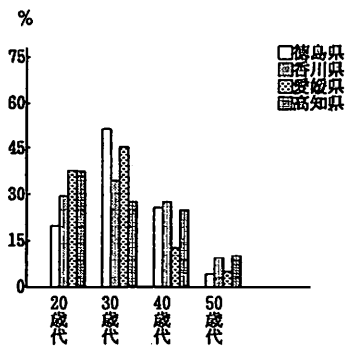


図1　対象者の年齢

専門実技種目について見ると，四国地区全体で球技を専門とする者が49.7%，陸上競技が15.4%，器械運動が8.1%の順で，ダンスは4.8%で四番目に位置づけられた。その他の種目は無回答も合わせて一割強であった。球技を専門とする者の割合が高かったことは，バレーボール，バスケットボール，サッカー，

テニス等，球技の種目が多いことと球技人口の多いことを反映している。

2）ダンス全般に対する考え方

学校教育におけるダンス学習は「踊る，創る，観る」の三つの柱から成り立っている。ダンスに対する好き嫌いについて，この三つの観点からみると次のとおりであった。図2のように各県とも共通した傾向を示した。四国地区全体の平均で，「観ることは好き」と回答した者は52.1%，「踊ることは好き」と回答した者は44.9%であったが，「創ることは好き」と回答した者は11.6%にすぎなかった。回答者の半数は「踊ること」も「観ること」も好きであるが，「創る」ことには抵抗を感じている。

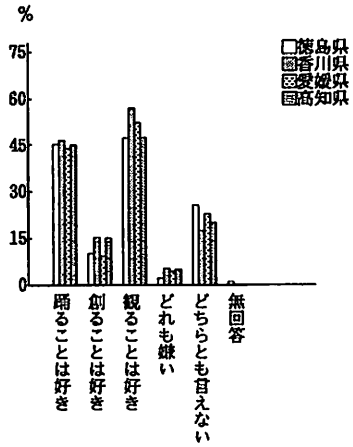


図2　ダンスの好きなところ（複数回答）

過去においてどのようなダンスの経験をしたかということも，ダンスに対する好き嫌いを決定する一要因であろう。調査対象者が「学校教育の中で」，「学校のクラブや部活動の中で」，または「稽古事として」の三つのそれぞれの場合において，いかなる経験をしたかは次のとおりであった。学校教育におけるダンスの経験については，四国地区の平均で，それぞれ小学校時代に15.5%，中学校時代に22.9%，高校時代には28.3%，大学時代には45.2%，卒業後10.1%であった。小学校，中学校，高校までのダンス経験は小学校教員の回答と比較して，僅かに下回っているが，大学時代のダンス経験は小学校教員の経験（34.9%）を上回っている。このことは，中学校教員養成課程または体育系大学におけるダンス教育が小学校教員養成課程のそれより僅かではあるが重視されていることを裏付けている。学校におけるダンスクラブや部活動経験をもつものは，小学校から高校まではそれぞれ1%代で，大学時代になって8.3%と上昇している。稽古事としてダンスを経験したものは小学校2.4%，中学校1.2%，高校0.6%と低く，大学1.5%，卒業後7.7%と僅かに高くなっている。全体的に，稽古事としてのダンスはあまり人気がないものであったといえる。

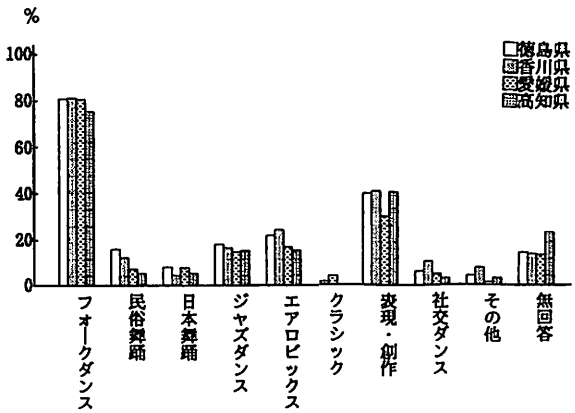


図3　自分が踊れるダンス（複数回答）

調査対象者とダンスとの関わりを学校教育における指導の観点からみると次のとおりである。まず，「自分が踊れるダンス」ではフォークダンスが最も多く79.8%で，次いで表現運動・創作ダンスの35.4%であった（図3）。中学校においては，運動会等で男性教員もフォークダンスを指導する場面もあり，男女の別なくフォークダンスには親しんでいる。人気のあるエアロビックダンスは19.3%，ジャズダンスは15.5%であった。「指導しているダンス」ではフォークダンスが57.4%，表現運動・創作ダンスは47.3%であった（図4）。他の選択肢と比較して、フォークダンスと表現運動・創作ダンスの割合が高いが，これらは当然指導すべき種目である事を考えると，むしろ回答者の半数しか指導していない実態に注目しなくてはならない。「自信を持って指導できるダンス」ではフォークダンス33.3%，表現運動・創作ダンス12.5%であった（図5）。「児童・生徒にさせたいダンス」は表現運動・創作ダンスが最も高く57.7%で，次いでフォークダンスの49.7%であった。エアロビックダンスは33.6%，ジャズダンスが23.2%と続いた（図6）。

授業におけるダンス観に関しては，次ぎのような結果がでた。「生徒にとってダンスが大切と思うか」については，95.2%の者が「大切」と答えている。その理由については，図7

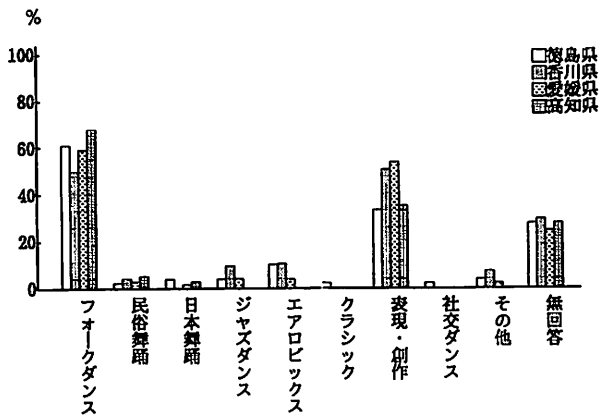


図4　指導しているダンス（複数回答）

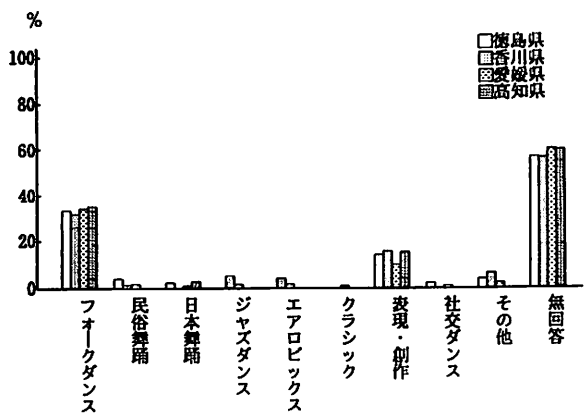


図5　自信もって指導しているダンス（複数回答）

に示すように「想像性・創造性豊かな人間を育てる」が19.1%,「感情を豊かにする」が18.4%,「表現・伝達の喜びを体験できる」が14.1%,「リズムにのって体力づくりができる」が8.4%であった。

「ダンスを体育の中で重視しているか」どうかについては図8－1に見られるように「他

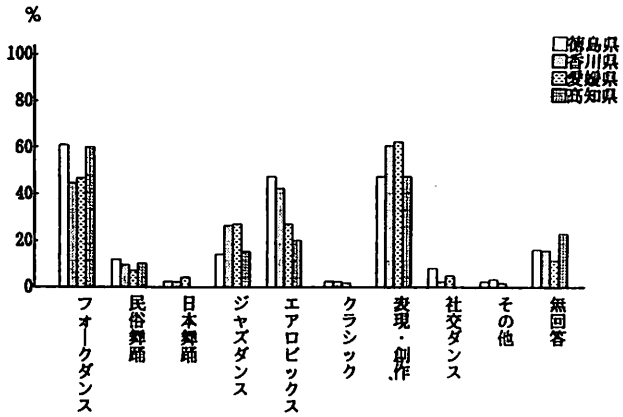


図6　児童・生徒にさせたいダンス（複数回答）

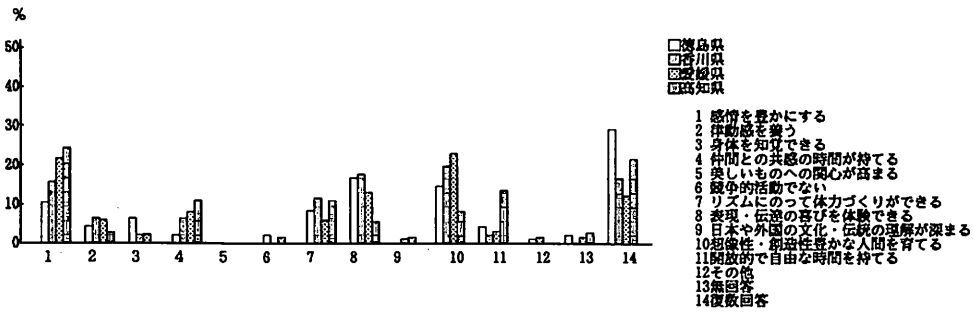


図7　ダンスが大切と考える者の理由

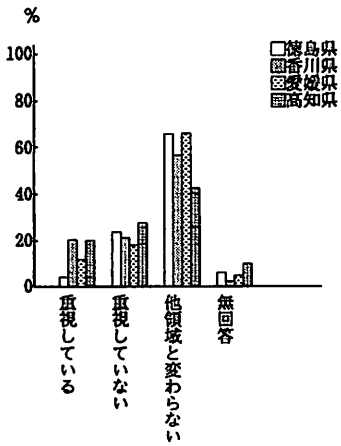


図8－1　ダンスを体育の中で重視しているか

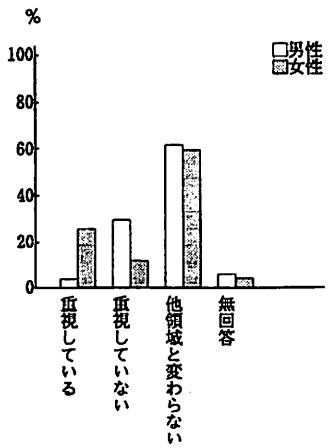


図8－2　ダンスを体育の中で重視しているか

領域と変わらない」と回答した者が60.4%であった。しかし，県によってバラつきは見られるが四国地区全体としては「重視している」(14.0%) より「重視していない」(20.8%) 割合が高かった。さらに，その回答を男女別に分析すると図8－2のように，県によって差はあるが，「重視していない」という回答は女性教員より男性教員の割合が高い。その理由の第一位は「自分に経験がない」(56.3%) で，次いで「周りにやる人がいない」(6.3%) であった。「女子がやるもの」(5.0%)，「他種目に比べ価値がない」(2.5%) という回答も低率ながら存在した。ダンスが体育の中で重視されない最大の理由は，ダンス経験をもたない教員が存在するという現実に由来している。

3）大学時代のダンス履修の実状

大学の授業での「表現運動・創作ダンス」経験の有無については，図9－1のとおりである。「一年以上」の経験を有する者は41.7%で，「二ヶ月未満」の経験から「一年未満」の経験を有する者は23.2%であった。しかし，ダンスの経験が「全くない」と回答した者が34.5%もいた。図9－2と図9－3のようにダンスの経験が「全くない」と回答した者について男女別に見ると，女性教員の13.6%に対して男性教員は54.0%と，経験のない者が男性教員に圧倒的に多く見られた。表現運動・創作ダンスを経験した者に対してさらに男女共習であったかどうかについて質問を行った。四国地区全体で35.3%が男女共習であったが，香川県と高知県においては男女共習によるダンス学習を経験した者は20.9%と20.8%で他

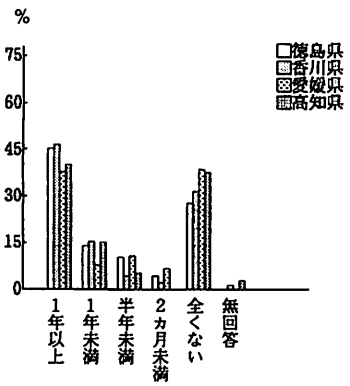


図9－1　大学の授業における表現運動・創作ダンスの経験の有無

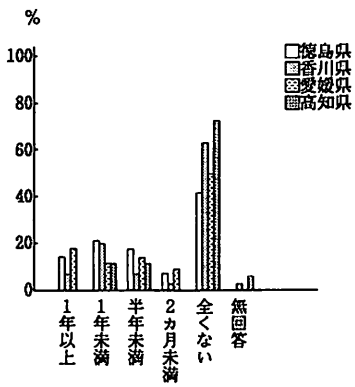


図9－2　大学の授業における表現運動・創作ダンスの経験の有無（男）

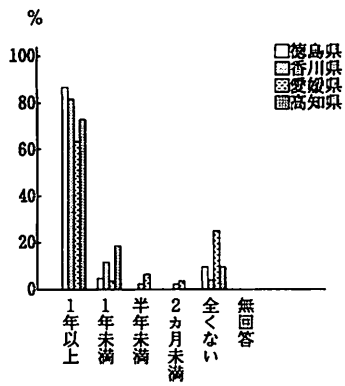


図9－3　大学の授業における表現運動・創作ダンスの経験の有無（女）

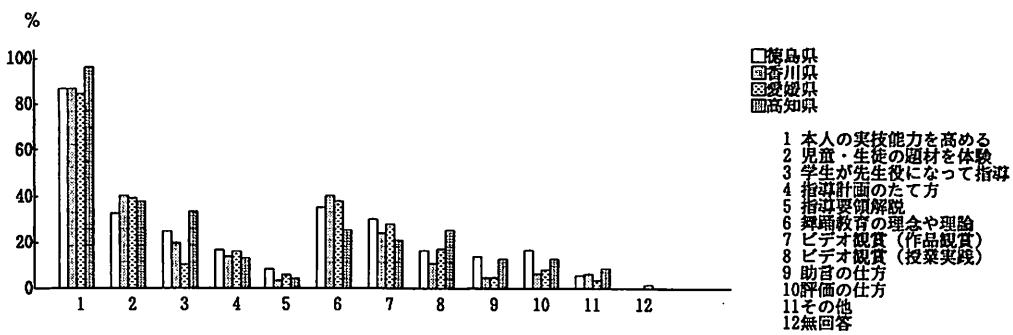


図10　大学の授業はどのような授業内容だったか（複数回答）

の二県より低くなっている。

大学の授業内容については，図10のとおりであった。「本人の実技能力を高める」と回答した者が86.7%で最も多く，次いで「児童・生徒の題材を体験」(38.1%)，「舞踊教育の理念や理論」(36.7%）であった。授業内容で取り扱われた実技内容については，図11のとおりである。「ステップ等の基本的な動き」(77.5%)，「リズムにのって動く」(73.4%）の割合が高く，「即興」(59.6%)，「作品構成」(59.6%）となっている。

大学における「表現運動・創作ダンス」授業の履修前と履修後の「表現運動・創作ダンス」に対する対象者自身の興味・関心・価値観の変化については，「プラスに変化」した者が68.6%で，「変わらなかった」者が29.8%であった。「マイナスに変化」した者が0.5%と僅かながら存在した。履修後の印象については「作品を創りあげた満足感・達成感」をあげる者が14.2%，「創作する難しさ」が11.0%であった。履修後どのような事が身についたかについては，「リズムにのって踊れる」(37.2%)，「自分を表現できる」(28.4%)，「自由に様々な動きができる」と「創造性や想像性が豊かになった」が（25.7%）であった（図12)。履修経験は役に立っているかについては，「役に立っている」者が77.1%で調査対象者全体の48.5%であった。一方，24.3%のものが「役に立っていない」と答えている。役に立っていると答えた者のうち，どのようなことが役に立っているかについては，次のとおりであった。「身体育成法」(68.1%)，「本人の実技能力を高める」(50.3%)，「リズムにのって動く」(48.5%)，「ステップなどの基本的な動き」(39.9%）等の上位の回答は踊れるための実技に集中した。「作品構成」(32.5%)，「動きを見つける」(31.3%)，「題材の見つけ方」(28.8%)，「児童・生徒の題材を体験」(27.6%）と続いている。

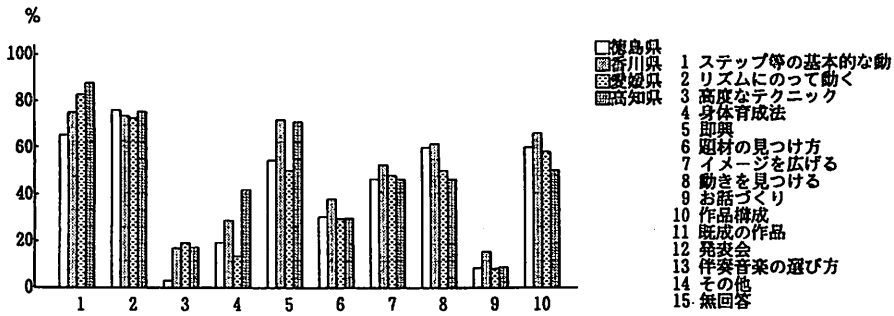


図11　実技内容はどのようなものだったか（複数回答）

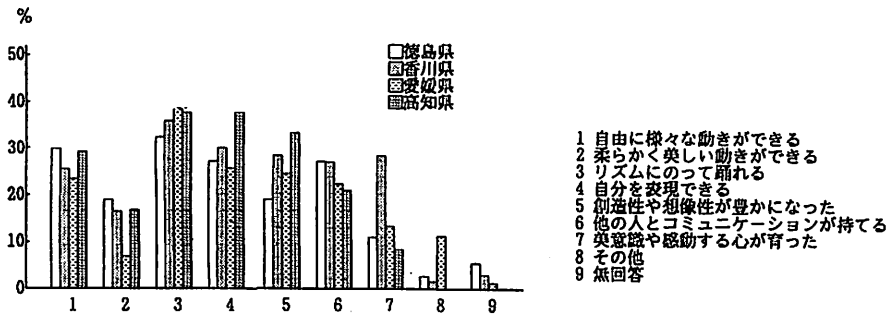


図12　どのような事が身についたか（複数回答）

表現運動・創作ダンスにはどのような価値があるかについては「感情を豊かにする」(17.9%)，「想像性・創造性豊かな人間を育てる」(17.6%)，「表現伝達の喜びを体験できる」(15.8%) と続き，回答は各項目に分散した。

4）中学校現場におけるダンスおよび研修・研究の実状

ダンスがどのようにカリキュラムの中に組み込まれているかについては図13のとおりである。「運動会の中に」組み込まれているのが61.0%で最も多く，「授業として」組み込まれている割合は52.7%であった。表現運動・創作ダンスの発表会については「授業の中で」行っているのが42.6%で最も高く，「学校単位」で行っているのが17.6%で，全く実施していないのは28.9%であった。

講習会参加，研究指定校，授業実践については次のとおりであった。「体操」，「スポーツ」，「ダンス」のそれぞれについて，昨年一年間にどの位参加したかについては，「無し（参加していない)」と答えたものが，「体操」で71.9%，「スポーツ」で40.5%，「ダンス」で66.0%存在した。ダンスについて開催される講習会の回数と他の種目との比較では，「多い」は3.9%，「同じくらい」は18.0%，「少ない」は29.0%であった。

ダンスの「研究指定校」になったり，ダンスを「研究テーマ」にしたことの「ある」者は9.8%で，「ない」者は88.4%であった。徳島県においては，「ある」者が17.6%と他県より高い割合を示した。また，ダンスの研究指定校になったり，ダンスをテーマに研究したことが「ある」と回答した者について，それを「誰が決定したか」という質問に対しては県により大きな違いが見られた。徳島県では，「研究グループで自主的に」，「教育委員会からの指定」，「外部研究組織の要請」がそれぞれ20%で「文部省からの指定」が10%と続く。香川県では，「教育委員会からの指定」が66.7%と最も高く，次いで「研究グループで自主的に」が13.3%であった。愛媛県では「外部研究組織の要請」が42.9%で最も高く，「学校が自主的に」は28.6%で，「研究グループで自主的に」と「文部省からの指定」が14.3%であった。高知県では回答者が最も少ないが，回答したもの全てが「研究グループで自主的に」であった。何故，「表現運動・創作ダンス」を取り上げたかについては，県によってそれぞれに違いが見られ，徳島県では「児童・生徒が生き生き取り組める」が，香川県，愛媛県では「一人ひとりが自分なりに取り組める」が，高知県では「他ではあまり扱わないので目新しい」と「感動的な授業が展開できる」がその理由の一位に挙げられている。

一年間の「ダンス」の授業実践については，図14－1のとおりで，「実施した」者が46.1%，「実施しなかった」者が53.0%であった。半数以上の者が授業実践していなかったことになる。しかし，回答者の半数が男性教員であったことから，授業実践の有無を男女別に見た結果は，図14－2，図14－3のとおりであり，実施した者の男女比は1：2であった。愛媛県を除いた三県において，男性教員の回答に「実施しなかった」割合が非常に高かった。男性教員が男子生徒のみを指導していたのであれば，この結果は当然と言えよう。

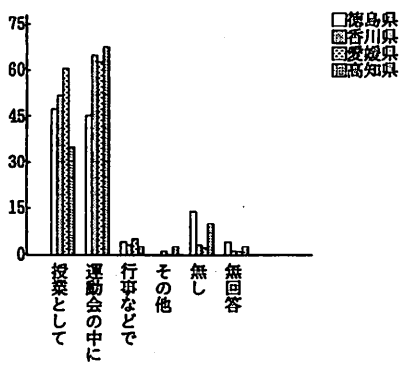


図13　表現・創作はどのようにカリキュラムに組み込まれているか（複数回答）

ダンスの授業をこの一年間に実施した者に対して「実施した対象学年」を質問したところ，三学年が64.3%で，二学年50%，一学年46.1%の順になった。対象学年は三学年が一番多かったが，高知県を除いて，特に偏る学年はなかった。年間授業時数は県によってそれぞれ違いが見られ，徳島県では「6時間以内」(47.4%）が最も多く，香川県では「10－12時間」(52.3%）が回答者の半数以上を占め，愛媛県では「7－12時間」に65.1%が集中し，高知県では「7－9時間」(36.4%）が最も多かった。文部省指導書の領域別時間のめやすでは15%（約16時間）とされているが，この時間で実施されているのは四国地区全体で5.8%であった。県別にみると，徳島県は0%，香川県6.8%，愛媛県6.3%，高知県9.1%であった。

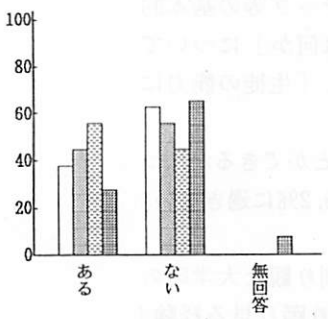


図14－1　1年間の「ダンス」授業実践の有無

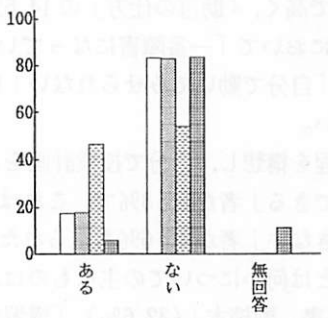


図14－2　1年間の「ダンス」授業実践の有無（男）

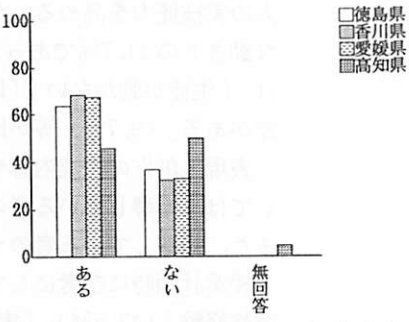


図14－3　1年間の「ダンス」授業実践の有無（女）

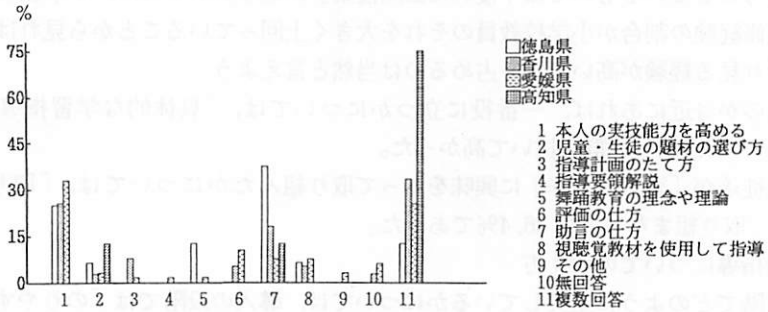


図15－1　今後身につけたいことの内容は何か　1

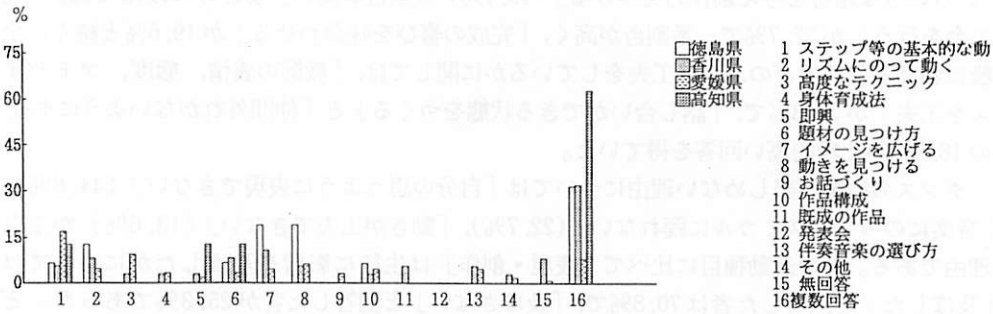


図15－2　今後身につけたいことの内容は何か　2

「表現運動・ダンスの指導が好きか」どうかについては，「好き」(20.8%) と「段々好きになる」(37.1%) の割合が比較的高い。好きな理由やきっかけは「子供の生き生きした表現に触れ，楽晴らしさを味わえる」(55.7%) が最も多く，次いで「ダンス経験から楽しさや楽晴らしさを知っている」(22.7%) がみられた。指導する場合にどのような内容なら自信をもって指導できるかについては「本人の実技能力を高める」(42.9%)，「児童・生徒の題材の選び方」(28.6%)，「助言の仕方」(23.8%) が主なものであった。

今後の見通しとして，身につけたいことがあるかどうかについては，「ある」と答えた者が38.1%，ないと答えた者が7.4%であった。「ある」と答えた者のうち，「どのようなことを 身につけたいか」について回答を得た結果は図15－1，図15－2である。ここでも「本人の実技能力を高める」が27.7%で高く，「助言の仕方」の14.6%，「ステップ等の基本的な動き」の11.7%であった。指導において「一番障害になっていることは何か」については，「生徒が動かない」(18.2%)，「自分で動いてみせられない」(13.0%)，「生徒の能力に差がある」(9.7%) 等が比較的多い。

表現・創作の授業内容や授業過程を構想し，自分で授業計画をたてることができるかについては，指導している者のうち「できる」者が56.8%で，これは全体の26.2%に過ぎない。また，指導している者のうち「できない」者が40.6%も見られた。

授業計画時に参考にしていることは何かについての主なものは，「踊り創り観た大学時の履修経験」(43.5%)，「実技の教科書，副読本」(32.6%)，「講習会での創り踊り見る経験」(31.5%)，「身近にいる先輩，同僚，友人等の指導」(29.3%) であった。小学校教員が授業計画時に参考としているものでは「優れた公開授業」が最も多かったが，中学校教員の大学における履修経験の割合が小学校教員のそれを大きく上回っていることから見れば，大学時代の創り踊り見る経験が高い割合を占めるのは当然と言えよう。

どんなものが身近にあれば，一番役に立つかについては，「具体的な学習指導のビデオ（フィルム)」(40.1%) が群を抜いて高かった。

一方，生徒達が「表現・創作」に興味をもって取り組んだかについては，「取り組んだ」は65.0%，「取り組まない」は26.4%であった。

5）効果的指導についての考え方

指導の段階でどのように工夫しているかについては，導入の段階では「のりやすい音楽を使用する」(35.3%)，「教師が一緒に動く」(20.3%)，展開の段階では，「班に合うアドバイスができるよう努力する」(31.6%)，「動きの広がりを教える（空間の使い方)」(19.7%)，「いろいろな題材を与え創作力をつける」(19.1%) の割合が高い。まとめの段階では，「発表会を行う」が32.7%で一番割合が高く，「完成の喜びを味合わせる」が19.6%と続く。全般にわたる指導でどのような工夫をしているかに関しては，「教師の表情，態度，アドバイスを工夫」が37.3%で，「話し合いができる状態をつくる」と「仲間外れがないようにする」の18.3%が比較的高い回答を得ていた。

ダンスの授業が楽しめない理由については「自分の思うように表現できない」(44.8%)，「音楽にのってリズミカルに踊れない」(22.7%)，「動きが工夫できない」(13.6%) が主な理由である。他の運動種目に比べて「表現・創作」は生徒に影響を及ぼしたかについては「及ぼした」と回答した者は70.8%で，「及ぼさない」と回答した者が25.3%であった。どのようなところに影響を及ぼしたかについては，「協力するようになった」が19.0%，「ク

ラスのまとまりが良くなった」と「表現力が身についた」が9.8%であった。「全然変わらない」という回答も11.1%見られた。

6）男女共修・選択制について

新しく導入された，体育における種目選択制の実施，男女共修についてどのように考えているかについては，図16に見られるように，基本的に選択制に「賛成」するが半数をこえる53.6%であり，「反対」するは8.8%と低い値ではあるが，「どちらとも言えない」が36.1%を占め，新しい制度に不安をもっている者が相当数見られる。県別にみると，愛媛県の回答者に「賛成」(61.0%）が多く，高知県の回答者に「反対」(20.6%）が多かった。選択制の実施時期については，選択制について「反対」の回答が多かった高知県での実施時期が最も遅い「1993年から」に集中しているが，他の三県では「1991年から」，「1992年から」のそれぞれに分散している。選択制実施の種目は，1991年度では「球技」41.5%，「陸上競技」21.1%，「器械運動」21.1%となっている。1992年度でも「球技」35.5%，「陸上競技」25.8%，「器械運動」21.9%の順である。

1991年度に男女混合クラスで授業を行うことがあるかについて，「行う」は16.9%，「行わない」は75.9%であった（図17)。男女混合クラスでの授業実施について，今年度（1991年）から実施される種目は「球技」21.1%，「水泳・スキー」15.8%，「陸上競技」12.6%であった。来年度（1992年）から実施される種目は「ダンス」12.9%，「球技」10.6%，「体操」，「武道」，「レジャースポーツ」のそれぞれが9.4%であった。

男女混合クラスの指導についてどのように考えているかについては図18－1から図18－7のとおりで，種目ごとの回答をまとめると三つのパターンに分けることができる。「体操」，「陸上」については「指導できる」，「指導してみたい」と考えている教員が多い。「球技」，「水泳」については，「指導できる」，「指導してみたい」と考えている教員が「指導はむづかしい」，「男女は別習がよい」と考えている教員をやや上回っている。しかし，「ダンス」，「器械」，「武道」については「指導はむずかしい」，「男女は別習がよい」と考えている教員が多くなっている。さらに，「男女は別習がよい」と考えられている種目の一位は「武道」で40.9%，二位は「水泳」で30.8%，三位は「器械」で29.3%となっている。

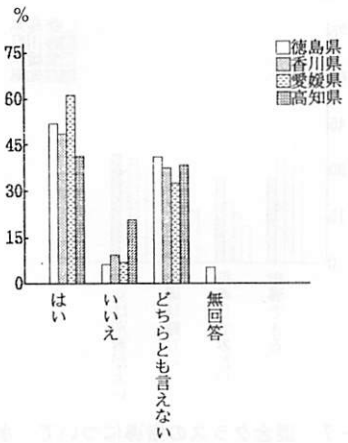


図16　選択制に賛成か

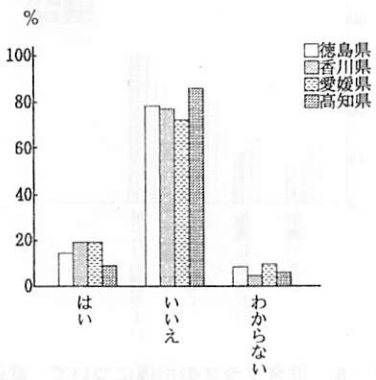


図17　男女混合クラスの実施

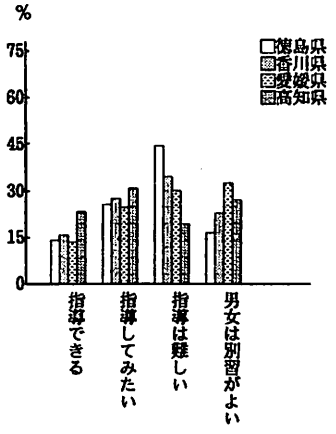


図18－1　男女混合クラスの指導について　ダンス

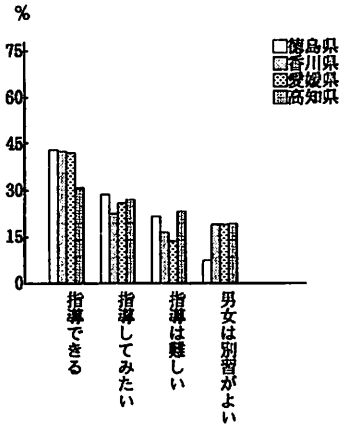


図18－2　混合クラスの指導について　体操

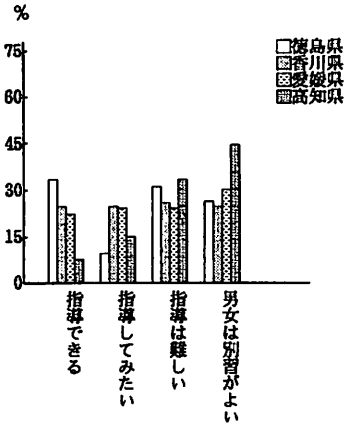
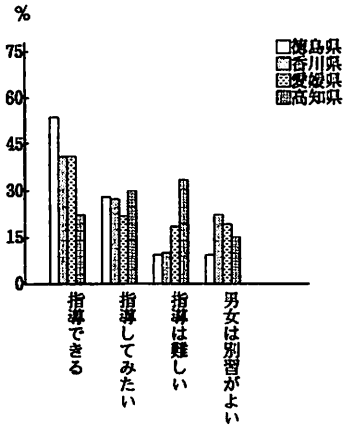
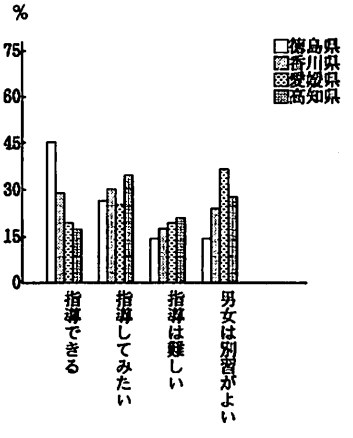


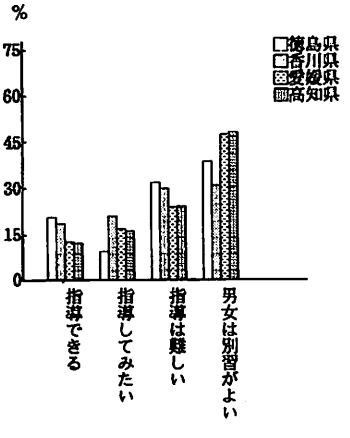
図18－3　混合クラスの指導について　器械



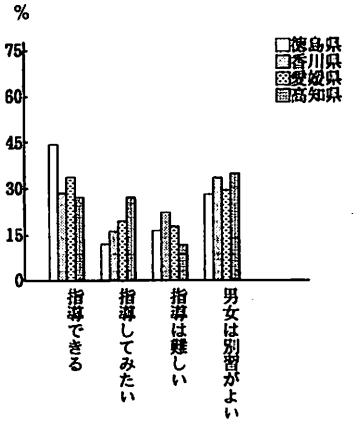
18－4　混合クラスの指導について　陸上



18－5　混合クラスの指導について　球技



18－6　混合クラスの指導について　武道



18－7　混合クラスの指導について　水泳

7）武道・ダンスの選択制

武道・ダンスの選択制についての実施状況や問題点，男女混合クラスでのダンス実践については以下のとおりであった。はじめに，武道・ダンスの選択制をどのように実施するかについては，「男子は武道，女子はダンス」が49.7%で従来どおりの選択を，「検討中」が31.7%で続いている。県別にみると，徳島県では，「検討中」が44.4%で「男子は武道，女子はダンス」が31.1%，香川県では，「男子は武道，女子はダンス」が最も高く65.2%で「検討中」が14.1%であった。愛媛県でも「男子は武道，女子はダンス」が52.3%で「検討中」が32.3%であった。高知県では「検討中」が60.6%と圧倒的に高く，「男子は武道，女子はダンス」が21.2%であった。次ぎに，選択制の実施に際して何か問題を感じているかについては図19のように，半数の50.2%が「男女教員数や比率に無理があり，学校側が内容や方法を決定せざるを得ない」と回答している。県別にみると，徳島県では「男女教員数や比率に無理がある」(49.0%)，「施設に無理があり学校側が内容や方法を決定せざるを得ない」(44.9%)，「中学では一度はどの領域も経験させてから選択させるべき」(28.6%）の順であった。香川県では「男女教員数や比率に無理がある」(57.0%)，「中学ではどの領域も経験させてから選択」(43.0%)，「生徒に選択させても全員の希望に応じきれない」(39.8%）の順であった。愛媛県でも「男女教員数や比率に無理があり」(43.2%)，「生徒に選択させても全員の希望に応じきれない」(38.6%)，「施設に無理があり」(34.8%）の順であった。高知県は「男女教員数や比率に無理があり」(60.6%)，「生徒に主体的学習態度が育っていない」(51.5%)，「施設に無理があり」(42.4%）の順であった。選択制について「問題を特に感じていない」者は四県ともに少なく，多くの者が何らかの問題を感じている。

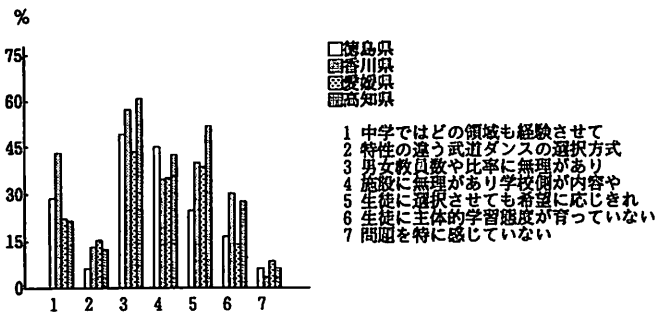


図19　選択制の問題点（複数回答）

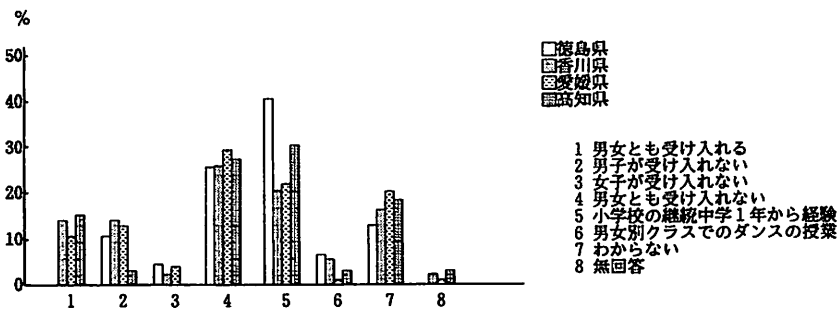


図20　生徒の受け入れ

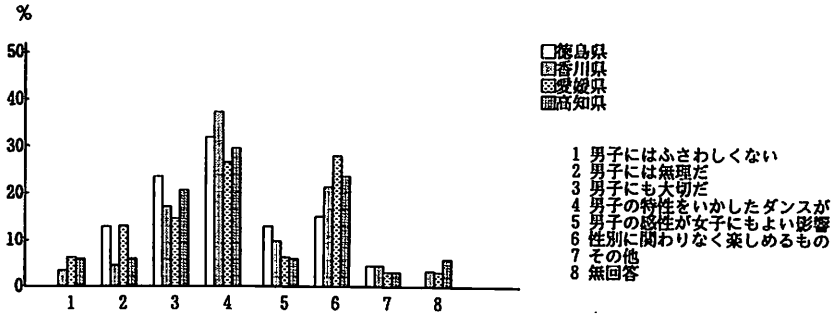


図21　男子のダンス

さらに，男女混合クラスでのダンスの授業を生徒達は受け入れると思うかという質問については図20のように，四国地区全体としては「男女共受け入れない」(27.5%）という否定的な回答と「小学校の継続で中学一年から経験すれば受け入れる」(25.2%）のようにやり方によっては肯定的な回答が相反ばしている。男子がダンスを踊ったり創ったり表現したりすることをどのように考えるかについては，図21のとおりである。「男子の特性を生かしたダンスができる」が30.9%と最も高く，次いで「性別に関わりなく楽しめるものだ」が23.5%，「男子にもたいせつだ」が17.3%と，男子がダンスを経験することに肯定的な回答が続く。否定的な「男子にはふさわしくない」(4.2%）や「男子には無理だ」(9.4%）という回答は少ない。

男女混合クラスでダンスの授業を行うことについてどのように考えるかについては，否定的な回答の「思春期で男女を意識し合い思う存分動けない」(46.4%）の割合が高く，「筋力，感性に男女の違いがあり，同じような内容・方法で扱うのは無理がある」(13.2%）と回答した者を合わせるとほぼ半数に上る。男女混合クラスでのダンスの授業に肯定的な回答の「男女相互の考え方が広くなり，理解し合い良い人間関係ができる」は14.8%で，「ダンスは男女ともに学ぶのに適している」は12.5%，「小学校の頃から区別のない授業を行い，男女ともに学ぶことを継続すべきだ」は8.9%の順であった。

ダンスの種目内選択についてどのように考えるかについては，教員自身が「いろいろなダンスを知らないので教えられない」(29.8%)，「発達課題として必要なものは指導者が選び，その時期に合わせて与えることが必要」(24.6%）と続くが「自由に選択でき，いろいろなダンス文化が経験できるほうが良い」は16.4%であった。男女混合クラスでダンスの授業を行うかについては図22のように，「行わない」(35.6%）と否定的な回答が「行う」(6.8%)，「今後行ってみたい」(17.5%）より多かった。また，「わからない」と答えた者が34.0%で，混合クラスでのダンスの授業について動揺している者が多い。

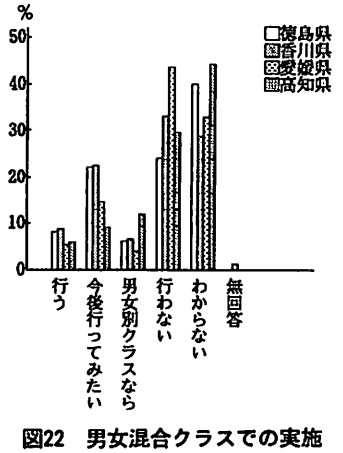


図22　男女混合クラスでの実施

男女混合クラスでダンスの授業を行う場合，どのようなダンスを教えられるかについては

以下のとおりであった。「フォークダンス」では，「指導できる」が78.1%，「不安はあるが指導してみたい」が15.1%であった。「民俗舞踊」については，「指導はむずかしい」が59.1%，「指導する必要はない」が18.2%であった。「日本舞踊」については「指導はむずかしい」が57.0%，「指導する必要はない」が28.1%であった。「ジャズダンス」についても「指導は難しい」が50.7%で「不安があるが指導してみたい」が27.0%で，「指導する必要はない」が13.0%であった。「エアロビックス」では「指導はむずかしい」が44.5%，「不安はあるが指導してみたい」が33.1%，「指導できる」のは12.5%であった。「バレエ」では「指導はむずかしい」が52.0%，「指導する必要はない」が40.5%，「表現・創作」に関しては「指導はむずかしい」が46.2%，「不安はあるが指導してみたい」が37.2%，「指導できる」のは9.4%であった。「社交ダンス」については「指導はむずかしい」が48.9%，「指導する必要はない」が38.1%であった。

男女混合クラスでのダンス実践についての情報は「全く知らない」と答えたものが79.4%で，8割近くの者が全く情報を持っていない。情報を有する者を県別にみると，徳島県では「実践をしているのを見た事がある」(12.0%)，「指導者の授業を聞いた事がある」(8.0%)，「自分で実践したことがある」(6.0%)，「実践記録などを読んだ事がある」(4.0%) の順に見られた。香川県では「指導者の授業を聞いた事がある」(11.0%)，「自分で実践したことがある」，「実践記録などを読んだ事がある」(6.6%)，「実践をしているのを見た事がある」(4.4%) の順に見られた。愛媛県では「自分で実践したことがある」(7.0%)，「見た」，「聞いた」，「読んだ」がそれぞれ2.3%の順に見られた。高知県では「聞いたことがある」が12.5%，「自分で実践をした」が9.4%，「見た」は6.3%であった。

4．考　　察

本調査は，前述のように全国調査に連動するものであり，四国地区の調査対象者は，その内数である。ダンスとの関わり，ダンスの経験と指導の現状，教員養成と現職教育については，全国調査結果（ダンス指導の現状と充実への課題－全国小学校・中学校・高校現職教員への意識調査から）と四国地区の調査結果を比較し，ダンスにおける四国地区中学校教員独自の，または全国と共通の問題点は何か，その打開すべき方向は何かについて以下のように考察した。全国調査対象者数は1497名であり，その男女比は全国調査と比較して，四国地区の回答率は男性が高かった。四国地区における小規模校には，保健体育教員が一，二名で，男性教員だけの配置という場合があるので，全国調査の男女比と異なったと考えられる。しかし，年代の割合，教職経験年数は全国調査とほぼ同じ傾向であった。

1）ダンスとの関わり

ダンスに対して，「踊ることは好き」，「観ることは好き」と答えた者は四国地区で44.9%と52.1%であり，全国調査の結果（約5割）とほぼ同じであるが，「創ることは好き」と答えた者が11.6%で全国の結果（2割）と比較して低い割合を示した。

2）ダンスの経験と指導の現状

ダンスの既習経験について，全国調査結果に見られるように，学年が上がるにつれ，ダンス学習経験者が増す傾向は四国地区でも同様であった。しかし，全国調査の結果が小学校時2割，中・高校時4～6割，大学時7割弱であったのに対して，四国地区の結果はどれも下

回っており，特に大学時に45.2%の者しか経験していない。また，大学時におけるダンスの経験について男女別にみると，ダンスの経験が「全くない」者は四国地区の女性教員で9.1%で1割弱であったが，全国の結果の0.5割の二倍に近い値である。四国地区の男性教員ではダンスの 経験が「全くない」者は41.4%であり，女性教員と比較するとかなり高いが，全国の結果（5～6割）よりは低い傾向を示した。大学時にダンスの授業経験をもたない教員が多く存在するということ，特に男性と女性の経験に差があることは今後再考しなくてはならない問題点である。

ダンス指導が「カリキュラム上にどのように組み込まれているか」をみると，四国地区では「運動会」が61.0%で最も高く，「授業」としてカリキュラムに組み込まれているのは，52.7%であった。「授業」としてカリキュラムに組み込まれている割合は全国の結果（7割）より低い。全国の結果では「運動会」の内容として組み込まれているのは，小学校，中学校，高校（6割弱，4割，1割強）と学校段階が上がるにつれて減少している。しかし，四国地区での割合は全国より高く，授業としてよりも，学校行事としてダンスを位置づけている傾向がみられる。

ここ一年間の「ダンス」の授業実践について，四国地区の「実践した」という回答（46.1%）は全国の結果（5～6割）を下回る割合であった。対象学年については全国の結果と同じく3，2，1年の順で実施されていた。実践者の男女比は1：2で，全国の結果3：7と比較して，僅かであるが男女差が少ないといえる。このことは，女性教員の実践者が全国の結果と比較して少ないためであり，あまり良い結果であるとはいえない。年間授業時間については，文部省指導書の領域別時間のめやすでは15%（約16時間）とされているが，この時間で実施できているのは，四国地区では5.8%で全国の6.8%を下回っており，めやすにはほど遠い時間数しか確保できていない。

四国地区の教員が「生徒にさせたい」と考えているダンスの種類は「表現・創作ダンス」が57.7%，「フォークダンス」が49.7%であった。「表現・創作ダンス」は全国の結果と変わらないが，「フォークダンス」をさせたいという割合は四国地区のほうがやや高い。その他のダンスでは全国の結果（2～3割）と変わらない。全国の結果において「自信をもって指導できる」のは，各々のダンスを「踊れる」教員数の約4割に該当していたが，四国地区においても同様であった。

ダンスが「生徒にとって大切か」という問について，四国地区では95.2%の教員が「大切である」と回答し，全国平均（9割）を上回っている。しかし，ダンスを体育の中で重視しているかどうかについては，60.4%が「他領域と変わらない」と答え，20.8%が「重視していない」と答えており全国の結果と変わらない。

中学校で指導計画を組めるのは，四国地区では地区全体の26.2%にすぎず，指導をしている者の56.8%で6割にもみたない。全国の結果で，指導計画を組めるのは全体の4割であり，指導をしている者の6割強であった。その際に参考にしているものは，大学時に自分が実際に動いて得た経験であり，それを評価し手がかりとしているのは四国地区でも同様であった。大学時の履修経験については，四国地区全体の半数で，回答者の77.1%が「指導に役立つ」と答え，実際に有効であることを示している点は全国の結果と変わらない。

3）教員養成と現職教育

大学履修経験，特に「踊り創り観た経験」は中学校教員にとっては指導の際の手がかりと

して重視されているが，指導の内容を検討することにより，今後のダンスカリキュラムの在り方について考察してみたい。

履修経験が「指導に役立っている」と答えた者に，指導に役立っている履修内容を質問した結果，「身体育成法」，「実技能力を高める」，「リズムにのって動く」，「ステップなどの基本的な動き」，「作品構成」，「動きを見つける」，「題材を見つける」，「児童・生徒の題材を体験」の順であった。「身体育成法」を除いて，全国の結果と大差がない。大学時の中心的履修内容と実技内容に挙げられた項目が「指導に役立つ」内容として選択される傾向は「身体育成法」を除いて殆ど変わりがない。さらに，大学時の中心的履修内容として上位にあった「舞踊教育の理念や理論」，「即興」，「発表会」が役にたつものの上位に挙がっていないところも全国の結果と同じ傾向である。

「指導時に障害となること」も「生徒が動かない」が18.2%，「自分で動いてみせられない」が13.0%で全国の結果と変わらない。「今後身につけたいもの」の内容も上位の「本人の実技能力を高める」，「助言の仕方」等が挙げられ，全国の結果と変わらない。

4）選択制と男女混合クラスについて

選択制について，四国地区では「賛成」の者が半数を超えてはいるが，賛成とも反対とも「どちらとも言えない」者が36.1%もいる。これは，選択制は実施してみないとその良さも問題点も明らかにはできないことを示している。現在の段階で感じている「選択制の問題点」は「男女教員数や比率に無理がある」，「選択させても全員の希望に応じきれない」，「施設に無理がある」の順であげられている。また，中学校であるということを考えて「中学では一度はどの領域も経験させてから選択させるべき」と考えている教員が29.3%も存在することは見逃せない。

男女混合クラスの授業については種目ごとに設問しているので，種目ごとの回答をまとめると三つのパターンに分けることができる。「指導できる」，「指導してみたい」と考えられている種目には「体操」，「陸上」が挙げられる。「指導できる」，「指導してみたい」と考える教員が，「指導はむずかしい」，「男女は別習がよい」と考える教員をやや上回る種目には「球技」，「水泳」が挙げられる。「指導はむずかしい」，「男女は別習がよい」と考えられている種目には「ダンス」，「器械」，「武道」が挙げられてる。さらに，「男女は別習がよい」と考えられている種目の一位は「武道」で40.9%，二位は「水泳」30.8%，三位は「器械」で29.3%となっている。ダンスについては26.2%の教員が「男女は別習がよい」と考えている。男女混合クラスでのダンスの授業を生徒達が受け入れるかどうかについては，「条件によっては，受け入れる」と考えている教員の方が「男子女子共受け入れない」と考えている教員より多い。ダンスを混合クラスで行うことについては「男女相互の考え方が広くなり，理解し合い良い人間関係ができる」，「ダンスは男女ともに学ぶのに適しており，相互の表現性や感じ方の相違を学べる」，「小学校の頃から区別のない授業を行い，男女ともに学ぶことを継続すべきだ」との肯定的な考え方を合わせても，「思春期で男女を意識し合い思う存分動けない」と否定的な考え方をする教員の方が多く，中学校のこの時期ゆえの理由で男女混合クラスでのダンス授業を難しいと考えている。しかし，男女混合クラスでのダンス実践についての情報は「全く知らない」と答えた教員が79.4%も存在することから，混合クラスでの実践を実際に体験したり，体験を聞いたり，見たりすることもなく，否定的に考えている教員が多いことを窺わせる。

ところが，男子がダンスを踊ったり，創ったり，表現したりすることについては「男子の特性を生かしたダンスができる」，「性別に関わりなく楽しめるものだ」，「男子にも大切だ」と考えている教員は合わせて7割になり，「男子にはふさわしくない」，「男子には無理だ」と考えている教員合わせて1割強を大きく引き離している。このことから，男女混合クラスでのダンス授業には，生徒の心理を考慮して，思う存分に動かないのではないかと考える教員も，男子がダンスをすることについては賛成をしている。

武道・ダンスの選択制について「検討中」は最も多く4割をこえている。旧来どおり「男子は武道，女子はダンスを行う」と指導者が選択すると答えたのは全体の3分の1に近い。

5．ま と め

まとめとして次の四点があげられる。

1）大学時の履修経験が，ダンス観，指導観，指導能力などに与える影響が大きく，指導実践を行わせる原動力になっていることは全国の結果と同じく四国地区についてもいえる事である。

2）指導の経験は指導観を育て，指導実践の原動力になると考えられているが，四国地区においては女性教員の指導実践の場が全国平均と比較して少なく，今後「指導の場」をどのように確保するかが問題である。

3）大学時履修の内容が「実技能力」を高める内容に重点を置かれていたが，その内容が「踊る」実技能力だけでなく，「創る」実技能力を高める必要があることは四国地区においても同様である。今後，大学のカリキュラムならびに講習会の内容が「指導法」に重点をおく方向に改められる必要があり，特に四国地区ではその必要性が強い。

4）男女の履修経験の違い，指導実践の違いは全国的に明らかであり，実践の拡大充実を進める一つの方法として，男性にたいする履修経験の拡大を図る必要に迫られていると既に報告されている。四国地区でも履修経験のない男性教員の回答にダンスの価値を認めない傾向があったことから，男性教員に対する履修経験の拡大とともに卒業後の研修機会を確保すべきである。

参　考　文　献

1）文部省，中学校学習指導要領，大蔵省印刷局，1989．3
2）文部省，中学校指導書，保健体育編，大日本図書株式会社，1989．7
3）文部省，高等学校学習指導要領，大蔵省印刷局，1989．3
4）文部省，高等学校学習指導要領解説，東山書房，1989．12
5）山下里子，松岡重信，「選択制授業の現状と問題点」，日本体育学会第43回大会号抄録，日本体育学会，1992.
6）越川茂樹，長見真，鈴木秀人，日本の教科体育における「選択制授業」に関する研究－「選択制授業」が有する意義の検討を中心に－，日本体育学会第43回大会号抄録，日本体育学会，1992.
7）文部省，小学校学習指導要領，大蔵省印刷局，1989．3
8）文部省，小学校指導書，体育編，東洋館出版社1989.
9）畑野裕子，茅野理子，三浦弓枝，松本富子，ダンス指導実践に関わる現職教員の意識－小学校を対象として－，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第12回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，1992．12,
10）松本富子，髙橋和子，茅野理子，細川江利子，佐分利育代，広兼志保，畑野裕子，ダンス指導の

現状と充実への課題－全国小学校・中学校・高校現職教員への意識調査から－アジア国際舞踊会発表論文集，JADE CONFERENSE PROCEEDINGS，August 2-6, 1993,
11） 畑野裕子，茅野理子，三浦弓枝，松本富子，ダンス指導実践に関わる現職員の意識－小学校を対象として－舞踊学会，1992.
12） 松本富子，群馬県小学校における表現運動指導の現状と充実への課題，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第11回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，1991．12,
13） 松本富子，松本恵美，表現運動指導における課題と方策－群馬県小学校の現状と教育実践を促進させる要因の検討から－群馬大学教育実践研究９号，1992,
14） 松本富子，他，小学校教員養成課程のための舞踊カリキュラム研究，日本教育大学協会保健体育・保健研究発表研究紀要，1987,
15） 高橋和子，他，舞踊教育におけるカリキュラムについて－日本教育大学協会所属大学の場合，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第５回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，1985,
16） ジェラルディン・Ｂ・シックス，　岡田陽・高橋孝一訳，子供のための創造教育，玉川大学出版部，1980,
17） Ｅ・Ｐ・トーランス，　佐藤三郎訳，創造性の教育，誠信書房，1970,
18） エレーナ・メセニー，　山口恒夫・山口順子訳，身体運動の表現学，秦流社1980,
19） Ｒ．Ｍ．ガニエ・Ｌ．Ｊ．ブリッグズ，持留英世・持留初野訳，カリキュラムと授業の構成，北大路書房，1991
20） 日本教育大学協会第二常置委員会編，玉城昭子，上原廣子，中学生男女による創作ダンスの実践的研究－学習指導の工夫及び検証－，教科教育学研究，第11集，第一法規，1993,
21） 日本教師教育学会編，教師教育をめぐる国際動向，教育者としての成長，日本教師教育学会年報，日本教育新聞社，第２号，1993
22） 安藤幸・中村久子，表現運動指導の現状と問題点－四国地区小学校教員を対象として－，「鳴門教育大学研究紀要」（生活・健康編）第９巻，1994